



シンポジウム開催報告

2008年11月14日

立命館大学言語教育情報研究科

立命館大学大学院言語教育情報研究科主催の講演会 「言語教育とイマーシブ・ラーニング (Language Education and Immersive Learning)」を下記のとおり実施しました。

日時： 2008年11月8日(土曜日) 14:00~17:30

会場： 立命館大学 衣笠キャンパス 創思館 カンファレンスルーム

成果：

第1部では、オーストラリアのサザーン・クイーンズランド大学 (USQ) の Australian Digital Futures Institute において、Online Collaboration and Virtual Worlds というプロジェクトのプロジェク・オフィサーを務めている Lindy McKeown 氏による「セカンドライフの USQ 仮想キャンパスにおける 3D 仮想世界での言語学習」(Language learning in 3D virtual worlds at the USQ Virtual Campus in Second Life) と題する講演と実際にインターネット上の仮想キャンパスに入って、各種の教育利用のための環境とツールの紹介、デモンストレーションが行なわれた。この仮想キャンパスでは、言語学習者のニーズに合うように、また自然なコンテキストの中での話し言葉や書き言葉を学び練習することをサポートするために、現在カスタマイズが進行している。セカンドライフという仮想世界の教育利用はまだ始まったばかりで、各種の実験が行なわれている段階であるが、講演当日は、このテーマに関心の高い院生が講師とともにこの仮想世界に入って、体験的な学習を行なうとともに、参加者に実際の利用の可能性をリアルに理解してもらうことができた。

第2部では、最初に USQ International の講師である Rowena Turton 氏から、「イマージョン言語教育と言語学習を高めるための仮想世界の活用」(Immersion Language Education and Utilising the Virtual World to Enhance Language Learning) と題する講演が行なわれた。Turton 氏は、(1) オーストラリアにおける外国語・第2言語学習の状況とイマージョン言語教育の概要を報告し、(2) 言語学習における仮想世界の利用の可能性に触れながら、(3) 遠隔教育の経験の豊富な USQ における言語学習に、こうした仮想キャンパスの導入実験を2つの段階を踏みつつ進める計画について説明を行なった。第2部の二人目として、USQ 教育学部の Warren Midgley 講師による「大学院における TESOL 研究のためのリサーチ・メソッド」(Research Methods for Postgraduate TESOL Studies) という題目での講演が行なわれた。Midgley 氏は、立命館言語教育情報研究科の院生に、2008年夏期に実施された TESOL プログラムの中の1科目として、TESOL リサーチ・スキルズを教授した経験を踏まえながら、(1) なぜ修士課程の TESOL 研究において、リサーチ・メソッドを加えることが重要なのか、(2) どのようにしてリサーチ・メソッドは修士課程の TESOL 研究において効果的に取り入れることができるのか、(3) 修士課程の TESOL 研究において、セカンドライフといったような新しい技術の可能性とはどういったものがあるか、という3点にわたって説明がなされた。参加者は、

TESOL 研究のための必須の要素としてのリサーチ・メソッドの習得について、認識を新たにするとともに、この分野においても、データの収集・分析、被験者へのインタビューなどの部分で、3D 仮想キャンパスの活用の可能性が高いことを確認することができた。

講演のあと、フロアーからの質疑が活発に出されて、各講師の丁寧な回答を含めて30分ほどの活発なディスカッションが行なわれた。

今後の事業への反映：

セカンドライフというインターネット上の3D 仮想世界の教育利用は、日本ではまだ幾つかの大学で実験的にしか行なわれておらず、どちらかといえば商業的な利用や娯楽、ゲームとしてしか理解されていない面がある。しかし、欧米やオーストラリアの教育機関では、これを教育ツール、環境として積極的に利用する実験が進められており、とりわけ遠隔教育の長年の実績を持つ大学などでの研究が進んでいる。私たちの研究科は、言語教育と情報テクノロジーを連携させた研究と教育実践を大きなテーマにしており、今回の講演会を契機に、先進的な実験を進めている USQ と連携して、言語教育分野において、世界中から、誰もが参加できる言語学習（英語、日本語、中国語などの言語交換を可能とする）の場を、仮想キャンパスの中の教室構築と各種ツールの整備により行なう実験に進む予定である。院生中の何人かは、すでにこうしたテーマを自分の研究課題にすることを考えており、その意味でも、早急に実験可能な環境整備に進む予定である。